

地域が変わる

地域活性化の現場

愛荘町

©愛荘町立 愛知川びんてまりの館 ▶ <http://www.town.aisho.shiga.jp/lib/info.html#echi>

## 不思議な「びん細工手まり」をシンボルに 手仕事を大切にしている町の魅力を発信



「愛知川びんてまりの館」での展示の様子

丸いガラスびんの中に、手の込んだ装飾の美しい手まりを封じ込めた不思議な工芸品「びん細工手まり」。その製造技術を守り伝え続けてきた愛荘町では、びん細工手まりをシンボルにした、まちづくりの取り組みが展開されている。

### 失われかけた技術を保存 町を代表する工芸品に

滋賀県愛荘町は2006年に秦荘町と愛知川町が合併してできた人口2万人余りの湖東の町。近江上布、近江刺繍などを生み出した手仕事の盛んな地域で、「びん細工手まり」は、この町を代表する工芸品だ。

当地のびん細工手まりは、江戸末期に花嫁道具の一つとして愛荘町に持ち込まれた。明治に入り全国各地の裁縫塾で作り方が教えられ、国内に

広く伝わった。しかし、第二次世界大戦後、作り手が急速に減少。日本からほとんど姿を消そうとしていた。ただ、愛荘町では主婦、青木ひろさんが一人こつこつと作り続けていた。

青木さんは1960年代後半には「日本で最後の伝承者」として、たびたび新聞で紹介されている。しかし、その青木さんも73年に他界。これを契機に、びん細工手まりの技術を途絶えさせたくない、「愛知川伝承芸能保存会」が町内の主婦を中心に結成された。保存会は後に「愛知川びん細工手まり保

存会」と改称、月1回公民館に集まって技術の研鑽に努め、現在の会員数は100名を超える。この保存会の活動があって、全国でも愛荘町だけに、びん細工手まりづくりの伝統がしっかりと受け継がれることになった。

### 観光資源として活用 「びんてまりの館」で発信

びん細工手まりが地域振興につながる愛荘町の財産として注目されるようになったのは、それほど昔のことではない。きっかけは96年の滋賀県による

「淡海文化市町村推進事業」だった。地域固有の自然や歴史を見直すことを働きかけたこの事業を受け、びん細工手まりを観光資源として活用する取り組みがスタートした。

旧愛知川町役場ではロビーやカウンターにびん細工手まりを展示するなどしてアピール。97、98年には保存会会員の中からびん細工手まりの制作指導者10人の養成を行った。

一方、96年には愛知川観光協会が発足。3日間の日程でびん細工手まりを完成させる「ふるさと体験塾」が、観光協会が中心となった実行委員会の主催で98年から始まった。この体験塾は受講者がびん細工手まりを体験するだけでなく、町内の名所観光、老舗料亭での食事などを楽しむことができる。現在まで毎年開催され、県外からの応募も多く、受講者を抽選で決定するほどの人気となっている。

2000年3月には近江鉄道愛知川駅構内に「コミュニティハウスーふる愛知川」が完成した。建物の前にはびん細工手まりをかたどったユニークな郵便ポストも設置された。保存会会員が制作したびん細工手まりを購入することができるのはこの施設だけ。わざわざ他府県から購入のために定期的に訪れるコレクターもいて、年々売り上げを伸ばしている。



「びんてまり展」の体験コーナー

そして、2000年12月、「愛知川びんてまりの館」がオープンした。びん細工手まりの実物に加え、歴史と制作工程をパネルと映像で展示している。毎年12月には「びんてまり展」を開催。新旧300点以上のびん細工手まりが出品され、約2週間の期間に約1500人の来場者でにぎわう。また、町内に住む初心者向けの講習会を年1回、子供を対象にした教室を年2回、これまでに開催し続けてきた。

### バイヤーも惹きつける びん細工手まりの魅力

現在、びんてまりの館には、年間約2万人が訪れる。

「閉館時には集客を維持できるか心配したが、その不安はすぐに払拭された。町の人が思っている以上に愛知川びん細工手まりには、人の心を惹きつける力がある。手仕事を大切にしている女性たちのがんばりや、人々の暮らしが垣間見えることも魅力」とびんてまりの館の小川亜希子副館長は話す。

最近では町の商工観光課や観光協会が、各地で行われる観光物産や産業関連の展示会に出展する際に、必ずびん細工手まりを出品するようになった。13年にベトナム・ホーチミンで開催された世界各国の工芸品を集めた展示会でも大きな注目を集めた。だが、



初心者向けの講習会も開かれている



毎年開催されている「びんてまり展」

出品の主な目的は地域のかげがえのない文化の発信であり、小売店や商社のバイヤーからの引き合いに応じる余裕がないのが現状だ。

### 高まる人気への対応 課題は後継者の育成

びんてまりの館の講習会や教室には、若い主婦や子供たちの参加が増えている。13年には愛荘町の歴史や文化、産業などを学ぶ小学校の副読本に、びん細工手まりが取り上げられた。子供たちの興味は今後さらに高まりそうだ。ただ、若者の多くが進学・就職・結婚で町を出て行く悩みはやはりある。

「高齢化が進む中、後継者の裾野を広げることが大きな課題。若い人たちがびん細工手まり作りを継続できるしくみの工夫、住んでみたい、住み続けたいと思えるような町づくりも大切な要素だと考えている。作りたい人が作りたい時に喜びを感じながら作る。そんな緩やかな環境も伝統を支えてきた。量産してほしいという要望は多いが、作り手のペースを大切にしたいという思いもある。若い人たちを巻き込んだ後継者育成の取り組みがカギを握っている」と小川さんは力を込める。

びん細工手まりをシンボルとした、愛荘町のプロモーションは着実に成果を上げてきた。そして今、地域の文化を守りながら、さらに高める次の展開が模索されている。